ここは三池港務所の荷役係二十八番飾分職場。長い間にわたる会社の弾圧と差別に耐え、驚くばかりの低賃金生活に苦しみながら、あくまで三池労組の旗のもとに団結し、闘っている五人の仲間たちがいる。

ここは港務所〜飾分職場

五人の仲間は

平松善夫さん
四十九歳。勤続三十五年。妻に母、子ども二人の家族もち。もともと操車手として宮浦駅に勤務していたが、そこを追い出されて今はここへ。

竹林　博さん
五十三歳。勤続三十一年。妻に子ども四人。もと貯炭の事務屋だったのを、まったく縁もゆかりもないここへ流された。

木下　章さん
五十二歳。勤続三十年。妻との間に子ども三人。はじめ貯炭のコンベヤー係だったのが、人事—港機電　港駅—機電、そしてここへとリレー式配転を食らった。「もう、ほかにはやりどころがないでしょう」と笑う。

酒井昭二さん
四十九歳。勤続三十四年。妻との間に子ども三人。はじめの船渠の曳ボート運転から貯炭をくぐり抜け、後ここへ。曳ボート運転を追い出されるとき、ストで抗議。「港務所の反合スト指令第一号です」、と胸をはる。

林田　勉さん
五十三歳。勤続三十三年。妻との間に娘三人。万田駅の保線から宮浦駅の雑仕事を経て、ここへ。

向って左から、林田勉さん、酒井昭二さん、平松善夫さん、竹林博さん、木下章さんの五人。団結している者の信頼からか、見よ明るいほほ笑み。

口には出せぬ〝三井〟

月給制が恥しい低賃金

飾分作業は

ここは港貯炭場の西辺で港近くの職場。積み上げられた粉炭の山を、まずショベルカーでホッパーに入れ、そこを通過する石炭をこんどはベルトコンベヤーで飾分機におくる。そこで自動的に作動して、粉炭と小塊炭とに飾い分けるのである。

そこで初めて製品となり、粉炭はコークス工場やアルミ工場へ。小塊炭は自衛隊か電化の浜工場に送られる。

一日の飾分炭量、ほぼ二百五十トン。常一番勤務で午前八時から午後四時まで。休憩は昼の中食時の一時間だけで、あと機械は回りっぱなし。さぞ、粉じんでの汚れにまいることだろう。

あきれる賃金

賃金は、一番低いのが木下さんで月総計十三万五千七百六十円。（昨年春闘で三千九百六十円上がった）。高い人が平松さんだが、それもわずか十四万三百七十円。（昨年の春闘で六千円上がった）

すでに五十歳をはね越え、勤続三十年以上でやがて定年を迎えようとしているベテランの賃金がこれだ。

それも、休めばたちどころにカットがまっている。それでいて、いわゆる〝月給制〟。

ひどいぞ差別

賃金は、細かく区分すれば八十にも及ぶランクで区分、すべては人事考課によってきまる仕組み。

「暮らしがどんなに苦しいからといって、俺たちは見向きもしないが、新労組員仲間はわざわざ仕事をつくってでも日曜出勤させてやったり……」とのこと。

事実また会社資料によれば、一昨年の十二月から昨年五月までの出勤方数が、ここの五人は百二十八方から百四十方なのに、新労組員の場合百六十方合はザラで、百七十台の人さえ見られる。「だから新労組の仲間は、俺たちはまあまあと安心していると、そこが会社のつけ目。それで、全体の賃金を低く押さえているのだから」と警告する。

苦しい生活

驚くべき低賃金生活を、家族ぐるみでささえ合ってくぐり抜けてきた。

まず妻の内職——大島紬の機織り。袋貼り。洗濯屋の包装。土方に失対人夫……など。

子どもは子どもで、高校・大学を奨学資金に頼る。東京で大学に在学中のある子どもは、常時新聞配りをやるのに加え、飲食店の手伝いそのほかにも体当たり。午前四時には、職業安定所の前に立つこともめずらしくないという。

春闘への決意

「とにかく、市役所にいっても学校にいっても、信用されない低賃金は一日も早く克服すること。天下の三井さんの会社で、まさかそんなことが……と笑われる今では恥かしか」——とは五人の仲間の声だった。

まず、十二人の上下揃いのヤッケ姿の仲間を一人ずつ紹介。その決意や意見発表が続き、その中に紅一点の女性と三池合板労組の井本湖三さんが参加されていました。最後に三池合板労組の藤本和博組合長が闘争の経過と決意を表明。その中で会社は組合に一言の連絡もなく合板に使用する機械類は全部、東京の佐々木商店へ売却済みで、「明日より搬出作業にかかる」とのことでした。

闘い続けている十四人の合板労組の人達は、昨日まで中小企業のアルバイト等で生活していられましたが、「今日からは総引き揚げになり、ピケに入り、仲間の協力で最後まで闘い抜く」と表明され大きな拍手が鳴り響きました。

雇用促進、失業反対を訴える車はこれから東京へと去っていきました。後には、合板労組の組合事務所の灯だけがこうこうと光を放っていました。

なお会社は、四人の守衛で警備に当たっているそうです。

〝反失業〟の闘いを

荒尾の決起集会に参加して

本所指導部　杉野　栄治

二月十九日、荒尾競馬場の手前の広々とした埋立地の一角にある三池合板の正門には、一台の中古車が置いてあり、二つのライトを真っ赤に塗りつぶし、大きく開いた赤いロいっぱいむき出した歯、雄々しく眉を書き、両側のどてっ腹には首切り反対と大きく書かれた文字。まるで怒りをこめた一労働者が、声ある限り叫び続けている姿は、七九春闘に先立ち心強さを感じるとともに、総資本対総労働で闘ったあの長い、苦しい三池闘争を思い出さずには居られませんでした。

有明の潮風の吹く夕六時頃、三池労組と荒尾地評傘下の働く仲間がかけつけたその中へ、一台の車が門を通って入ってきました。遠く鹿児島を出発してきた車で、十二人の仲間をのせていました。

この仲間と、千日を越える首切り反対闘争が闘われている地で、七九春闘へ向け、雇用促進、失業反対の決起集行が行なわれました。

苦しみもがき死亡

じん肺患者相次ぎ二人

今年にはいってから、早くも二人の三池のじん肺患者（三池じん肺会会員）が死亡した。

まず一月二十六日、荒尾市新図団地に住む西島浅喜さんが死亡。西島さんはかねて鴻江病院に入院、同じ患者仲間といっしょに加療中だったが、前日の夜自宅に帰りかけたところ途中で気分が悪くなり、帰るのをやめて病院にひき返した。

そして苦しみ始め、翌る朝の八時半にはもう不帰の客になってしまったもので、行年六十八歳だった。後に取り残された妻のカナさんは、悲しみのうちにも「これまでも、人が息をひき取るところを見たことはありますが、主人のような苦しみ方は見たことがありません。どうしようもありませんでした」、と語ったという。（じん肺会役員＝山根重人さん談）

それから一週間目の二月三日、こんどは同じじん肺患者の原口利男さん（荒尾市西原）が、入院先の高岡病院で死亡した。聞けば原口さんの場合も、前の晩に入浴したほどで別状なかったのに、夜なかから突然苦しみ始め、余りの苦しさに両手指で胸をかきむしりながら息をひき取っていった。行年は、原口さんも西島さんと同じ六十八歳だったが、じん肺という病気が秘めている死亡時の残酷さを痛いほど焼きつけている。

心から哀悼の意をささげる。

春闘について思う

三川指導部　猿渡　孝良

長期化する不況とインフレのなかで雇用不安と中小企業の倒産が続き、深刻さを加えています。

石炭産業も鉄鋼の七割操業、需要の縮小、輸入炭との間の価格差などのため、貯炭が増加しています。三井三池も生産制限にはいり、公休出勤、残業などの規制と経費の節減、さらには定時間における労働密度強化などの合理化攻撃が、各職場できわだってきました。

「賃金自重論」「抑制」「経費支払い能力」などの説をふりまいて「福祉切り捨て政策」を押し出し、雇用不安の実態を前面に出しては、マスコミは春闘への先制攻撃的な宣伝をしています。

私達の生活はどうでしょうか。七八春闘での三・三%アップの一方百六十八円の賃上げは、四・五%という物価上昇を下まわる回答で押さえられた。

賃上げの不足分は、次の闘いまで生活を切りつめながらしのいだのだったが、夏の期末手当の獲得額もダウン。これまた前年同期の実績を下まわる額で押えられた。その結果、期末手当で家計の不足を補うのが困難になってきた。

厳しさは、家庭生活のなかにさらにこんできた。政府発表の物価指数からしても、賃上げが物価指数を上まわって初めて、生活が維持できるのである。それは、結婚共料金の値上げをはじめ、物価上昇分も考えてこそ、最低の賃上げ要求額のはずです。

厳しい家庭生活・家計は、若人も定年間近かな人も問わず食費や被服費などを削減し、家族の苦しい内職による収入など、おもに耐乏生活によって維持されているのです。だが、生まれる子供、小中学入学、高校進学、結婚、土地、住宅、老後の生活、医療など身近かにある不安材料を率直に出し合い、そして自らの賃上げの闘いにする。未組織労働者の賃上げに本気で取り組む。必要な賃上げを取りたいと願うなら、こうして闘うことが先決問題です。

企業は減量経営によって、九月期の決算では減収増益となり、この三月期決算ではさらに伸びて増収増益になるのは確実です。資本は利潤追求に労働者に犠牲を押しつけ、経済危機を乗り切り、資産を残す。

黙っていても、幸せは遠い所を通り過ぎていくだけです。高温多湿な職場環境で働いている労働者にふさわしい賃金と生活を実現するため、全労働者が結集する国民春闘に立ち上がろう。暗いトンネルは、一人ひとりが結集してこそくぐり抜け、明日への展望を切り開くことができるのです。

七九春闘を、労働者の統一闘争で勝利しましょう。

×

組合員・家族の皆さん。新労組員や社外工の皆さん。いよいよ春闘です。ご遠慮なく本紙にご意見をお寄せください。

編集部

手記

暗いトンネルを——くぐり抜ける闘いを